ペリフェリ ④

職歴に見る外縁性と中核性

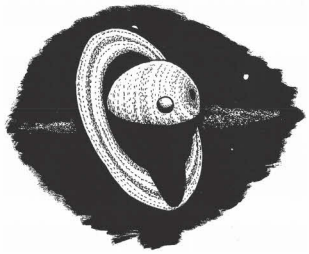
日本赤十字社 常任理事　渡邉 芳樹

官僚人生38年間の職歴にも外縁性と中核性を見出すものである。私の場合、外国、政治、報道という三分野との関係が外縁性の強い職歴である。

また「官房仕事ばかりしていると馬鹿になる」と先輩から忠告を受けたのは、75年厚生省に入り法令審査や対外調整を行う官房総務課に配属された頃だった。吉村仁総務課長等の薫陶を受けた。その後は援護局と水道環境部に配属され戦没者遺族等援護、廃棄物行政に精力を注いだ。

官房総務課審査係長を経て81年から課長補佐として老人保健法制定に参画した。初めて携わった社会保障改革だった。また84年にかけて短期間ながら知的障害者や母子家庭の課題に触れ貴重な経験を得た。

その直後からスウェーデンで3年間日本大使館書記官として彼地の人と政策に学んだ。赴任の際に大先輩から旧内務省の厚生省で海外勤務を選ぶとは情けないと説諭されたこともあった。87年帰国早々、霞が関外縁の国会内政府委員室に勤務。ここでも「1年もやると馬鹿になる」と言われた。消費税国会を挟み2年間政治と並走し多くを学び人脈も得た。



その後、官房政策課、保険局医療課を経て、92年には広報室長として省の広報や報道の対応に携わった。かつて吉村仁事務次官は下手な広報より優れた報道が大切と言い切った。報道の立場から厚生省を見ることは有意義であり、以降報道関係者との交流は長く続いた。

その後の私の職歴は、内閣官房勤務を挟みほとんどは医療保険であり、最後に年金になった。社会保険庁長官退官後、二度目のスウェーデンで特命全権大使を3年余り務めた。計6年余りの在外勤務は私の外縁目線を決定づけた。

厚生官僚の本領は福祉・医療。現場に飛び込み優れた実践家や指導者を発掘し、自らを鍛え、当事者や専門家とともに社会を導く重要な政策思想を形成する。その担当部局こそ本来の中核組織であろうが、私は配属経験が少ない。

他方、巨額の税・社会保険料負担で成り立つ保険・年金制度の給付と負担の大改革は内閣の命運がかかる。担当する保険・年金部局が省内外から中核組織と見られやすい。

私は度々保険・年金改革を担った。元来のスペア意識と多くの外縁経験は、政策形成のみならず政治家との親和性・信頼性から有益だった。深刻な軋轢を苦にしない力にもなった。加えてマイノリティに対する共感と知恵の模索につながった。不思議なものである。